
最凶なあの人

夜製ぽるぽる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最凶なあの人

【Zコード】

N6077K

【作者名】

夜製ほるほる

【あらすじ】

友達の姉ちゃんが怖いのなんのって

赤外線

「うわっ、今日メッチャ晴れとる。出かけよと思つとたけど日差しきつすぎるわ。こんな日に外出たら赤外線がきつ過ぎて皮膚癌になつてまうわ」

「そだな。てかなんであなた関西弁でしゃべつてんの？読者様があなたのことのこと関西人やと思うで」

「うつってんじゃねーか、後関西弁だけじゃなくて赤外線も突っ込もう」

「？赤外線に突っ込む？なんで？」

「え！浴びすぎたらいけないのは紫外線だぞ、赤外線はストーブとかから滲み出てるやつだぞ！薩摩芋暖める時においしくしてくれるやつだぞ！」

「まじか、紫外線は人間の敵だけど赤外線は人にも芋にも優しいやつなんだな知らなかつたぜ」

「お前は可哀相なやつだな。あれところで最初の発言者は何で黙つてるの？と言つた顔も赤いんですけど」

「もしかしてあいつも素で間違えてたんゲフッ・・・・・」

えろり。そして、バタリ

「何か言つた？」

ピクリとも動かない相方を見る。

「ひいらを見る般若を見る。

田を逸らす。

「いえ、まあ何も特にありません」

「ならいいのよ。そこの動かないモノはそういう庭にでも捨てとしまが
しそうか」

有無を言わせない圧力がかかる。

だが、あいつは俺の親友。馬鹿だけど親友だ」「は助けるべきな
んじや！」

心を奮い立たせて言つてやるぜ。

視線を合わせる。

よし言つてやるー

「そうですね。捨てちゃいましょう」

何あの田じつち見るとおれへ人間見てくれてるような田じやな
かつたんですけど。

倒れてるほうに対しては最初から落ちた「」のとでも聞こたげ
な視線なんですけど。

本能で回避しちゃつたんですけど、考えてたのと口元した言葉が
まったく別物に変換されちゃつたんですけど。

「はー、よろしく。」

「こりと向けられたアルカイックスマイルに俺は赤面を通り越して青ざめたね。だつて目がまったく笑つてないんだぜ。」

それから俺は親友のなきがらを庭に引き摺つていき庭に出たときに再び笑顔で「アイス買って来い」との命令に一つ返事で了承しコンビニまでマジダッシュ。好物である小豆バー購入（自費）そして再びのダッシュ、パシリ根性が滲み出でますが仕方ありません。だつてあの人橘桃代さんに敵う筈がないのだ。

あの無敵超人に敵うわけないんだ幼い頃からあの人には頭がまったく上がらない俺も、俺の親友でありあの人の中でもある橘颯太も。

「桃代姉さん。アイス買ってきましたよいつも通り小豆バーで大丈夫だよね」

「あれ、和樹どこ言つてたの？」

「お前が倒れてた間に少しパシリをな……」

氣の毒そうにこちらを見てくる。

何だその哀れみの目は！正直、ボディに一発食らつて倒されたお前よりもましだと思う。105円での攻撃を避けられるならいくらでも払うね俺は。

ピタツ

「ひやつ。何、何なの？」

「ハイ麦茶。外暑かつたでしょ、『苦勞様』

「いや買いに行かせたの……」

ギロリ

「いえ、なんでもありません。」

黙る颯太こいつかなり調教が進んでやがるな。

俺も人の事言えないが、だつて冷やした麦茶を用意してもらつて

いるだけでうれしさを感じてしまつていいんだから。正直勝てるき
がしないねこの人には。

あの笑顔忘れられなくて（前書き）

投稿遅くなりました。

友達が生体肝移植するやらで4月は「ゴタゴタ」取りました。
下手糞なりに頑張るのでよろしくお願いします。

あの笑顔忘れられなくて

そもそも、なんで俺たちがこんなに調教されてしまつているかと言つとそれは俺たちの幼少時代に遡るはめになる。やつあの日もこんな茹だる様な暑い夏の日だった。

じりじりと照りつける真夏の太陽とこれが最後よと鳴き続ける蝉の声に当時5歳の俺は浮かれていたんだ、気分はまさに俺の夏状態ですよ。そんな感じで今日も朝から昆虫採取に出かけようとしていた。母親に公園に言つてくるとつげ家を出ると家の前に大きなトラックが止まつていた。

そのトラックを馬鹿面でボーッと眺めていると知らないおじさんとおばさんがこちらを見ているのに気がついた。こっちが気づいたのに気づいておばさんが話しかけてきた。

「こんなにむかわ

「こつこつと笑顔で挨拶してくる。見た感じつづけの母ちゃんと同じ年くらいに見えるのでその時俺はその人をおばさんと呼ぶことにした。

「こんちわ、おばさんたち誰?何してんの?」

「今日から此処に引っ越してきたのよ。ようじへな

「よのじへ。俺、おばさんたちの家の前の家に住んでる石糸和樹つてのね、おばさん達は?」

「やつかお向かいさん家の子ね、私は橋越つて言つたよ。やつだ、

和樹くんは今いくつなの?」「

「俺ね、今年で四歳」「

指をパツと四本たたせて見せる。

その時おばさんは良しとばかりに頷いてから

「そつか、家にもね和樹くんと同い年の子がいるのよ良かつたら遊んであげてくれないかしら?」「

「いいよー!でもどーいんの?」「

「ちよつと待つてね」と言い残すと俺に背を向けてパツと玄関の方まで駆けて行つた。少しすると家中から一人の子供を連れておばさんが戻つてくる。

「はい、じゃあ紹介するはね右の子が颯太で左の子が桃代つて言うの仲良くしてあげてね。」

「うん! 俺、石条和樹四歳よろしく!」

「ホラそういうやん、ももちゃん挨拶して。」

おばさんから促されて右側の颯太と呼ばれていた方が口を開いた。

「僕、橘颯太つて言つのよろしくね。僕も和樹くんと同い年で四歳なんだ」

颯太の方はそう言って人懐こそうな笑顔を浮かべた。身長は僕と同じくらいか少し颯太のほうが小さいくらいだ。

「私は颯太のお姉ちゃんの桃代つて言つのよ、よろしくね」

桃代の方も同じような笑顔だったがこちらの方が幾分男のこじらし

さがあった。言つなら颯太が一ツ「コ」で桃代の方が一カツでな具合だ。

「じゃあ、やうちゃんとももむちゃんは引越しの片付けのお手伝いはいいから遊んでらっしゃい。」

「「はーい」」

「元気よく返事して歩き出そうとする、俺もそれについて行こうと歩き出そうとするおばさんに呼び止められた。

「やうだ和樹くん今度から私のことはおばさんじゃなくて梢さんで呼んでね」

「えー、でもうちの母ちゃんと同じ年だからおばさん・・・・・・と言いながら振り返ると一矢「コ」と笑っていたおばさんと田が合つた

「おばさんじゃなくて梢さんでしょ」

「びくつと何か恐怖を感じとつて

「はい。梢さん」

「そう呼ぶとそれまでのなんともいえない恐怖感がきえて、打つて変わつて優しそうな本来の笑顔のあり方と言つのが正しいのかそんな感じのもが呼び出された感じになつた。

「うわー、今思い出してみると桃代姉さんのあの時の笑顔つて梢さんそつくつじやん。さすが親子だよ大迫力だよどちらも有無を言わせないフレッシャー過ぎですよ。五歳児に無言の圧力で言い聞かせるなんて半端ないな梢さん。と今はそんなことじやなくて話を元に戻すと。

「はい、良く出来ました。じゃあ三人とも氣をつけて遊んでらっしゃいね。いつてらっしゃい」

「いつにねね～す」「

「和樹は凪太と同い年なんだよね」

そう言って三人で歩き出した。すると桃代がこう切り出してきた。

「うん、もうだよ」

「じゃあ、私が一番上のお姉ちゃんだから和樹は私のことを颯太と同じようにお姉ちゃんて呼ぶのよいわかつた？」

わかつた。でもお姉ちゃんにて恥ずかしいから地

「うん、じゃあ和樹はそれでいいわよ」

「ところで和樹今日はなにするの？」

俺は今日公園に虫取りに行くはずだったんだけど姫太たちは何か

「業も虫取りでいいよ」

「私もそれでいいよ、じゃあ出発だー！」

そ二語ふと機作が先頭で走り出した
すると竜介が刀を抜き声で機

「待つてよ、お姉ちゃん

「何よ、颯太男の子なんだから」これくらいの速さ着いてきなさい」と

元気よく駆けていつた桃代がピタッと立ち止まつて顔が見る見る

間に赤くなっていたく

そりゃあんだけ元気よく走り出しどいて場所知らないとか恥ずかしくて仕方ないだろ。しかもそれを弟に突っ込まれるつてどんだけですか。

「はははっ、お姉ちゃんのジジ」

「どーじ、どーじ」

一人で爆笑しながらからかっていると顔を赤くした桃代が肩を震わせながらこちらに歩いてきた、それを見た颯太はハツと表情をこわばらせるを見る見るうちに顔が青ざめていく。そんな颯太を見ながらも俺はまだ笑い続けていた。俺ら一人の正面に桃代が立ち止まる

「二人とも正座しなさい……」

それを聞いた颯太は即座に正座した。そんな二人を見ながら俺はまだ笑っていた。

「二人と言つたのよ和樹あなたも正座するのつ！」

言つが早いか俺の手を掴んで腕を少し捻つたかと思うと掴まれた腕を支点にして俺は宙を飛んでいた。そして一回転して足から着地。そして呆然としている間に膝カツクン。両膝を地面に着けた所で肩をグツと押さえると……。強制正座の出来上がり！ 一切の抵抗も許す暇ない一連の流れ作業はまさに圧巻。

「ふう、二人とも正座したわね」

「……何が今あつたの？ なんで座つてんの？ てか、さつき宙浮いてなかつた？」

「夏のアスファルトつてアツツ、しかもゴツゴツして痛いっ！」

俺と颯太の前で仁王立ちしながら桃代が腰に手を当てて説教しだ

した。

「余計なお喋りしない！……いい、一人とも女の子には優しくしないさい。……女の子は男の子よりも弱いんだから丁重に扱いなさい。……良い分かったの？わかつたら返事！」

永遠と5分近く真夏のアスファルトの上で正座アンド説教くらつて意識が朦朧と仕掛けていたところでやつと説教地獄から開放される。

「「はい！」」

「反省したわね、なら立ち上がってよし。今度からは氣をつけなさい」

お説教が終わって何気なく皆でまた公園に向かおうとしていた所で俺はふと思い出した。そう言えば正座させられるとき空浮かなかつたけ？

「ねえ？さつき俺空飛ばなかつた？飛んでたよね！てか、桃姉ちゃんが何かやつたんだよね？」

あの笑顔忘れられなくて（後書き）

なにぶん素人なものでいまいち話の止めどころがわかりません。
コツ等がありましたら教えてください

ヒーロー。『ガキ大将』（前書き）

なんかはなしの方向性でか辻褄が可笑しい気もします。
どこが駄目か指摘していただけるとうれしいです。
生体肝移植の友達無事退院しました

ヒーロー。『ガキ大将』

「「ーー」」

そう俺は飛んだんだ、捻られてから飛んだんじゃなくて飛んでから捻られたんだ。

「手を掴まれてからふあつてなつた。そしたら手を捻られて一回転しちやつたんだ！何で？」

「人が不味いといった感じに顔が歪んだ。

「気のせいじゃない」

「そうだよ。気のせいだよ」

「そんなことないよ。絶対飛んだよ！ねえ、何がどうなつたの？」

何度もかの押し問答の末に仕方なさげに桃代が話し始めた。

なんでも桃代の話によるところの原理なんかわからないが感情が昂ぶつた時に物を持つていたりすると何かの能力で持つているものの重さを消してしまつ事が出来てしまつらしい。それがさつき俺を浮かせた力で別に怪力とかではないらしい、桃代の意識としては持つている物の重さがふつと消えてしまうらしい。そしてそれが桃代達家族をこの町に引っ越させた原因でもあるのだ。

せつから「らしい」ばかり繰り返しているが全てにおいてハッキリしている事が無く曖昧なので仕方ない。因みに今だにちゃんと調べていなから「らしい」が取れることは無い。まあ、そんな事はおいて置いて話を過去に戻すと。

その日桃代と颯太は一人で公園で遊んでいたのだが、そこに桃代と同い年の男の子3人が公園に入ってきて遊び場の取り合いになつ

た。男勝りだつた桃代と相手のリーダー格の男の子が取つ組み合いになり、その時に突然能力が発動され相手の男の子がボーンと吹き飛び運悪く腕を骨折させてしまった。そして相手の親御さんが出でたり、その光景を見ていた子供たちには怖がられたり、あること無いこと噂が広がりして居辛くなつたのでこの町に引っ越してきた。

と言うのがココにいたる経緯なわけでこの能力が今俺に露見してしまつたため、また不味いことになつたと言つわけでまた居られるくなるかも知れないのでドキドキなわけで一人の顔は緊張で強張つている訳で。

しかし、いかんせん子供の頃の俺といえば言わずと知れず馬鹿だったのだと近所さんにも「石条さん家の子はいつも元気がいいわネエ」といわれるところぶる評判の良い子だ。だから普通なら怖がつて腰が引けてしまつような経験に近いものをしてのにもかかわらず

「すつ、すつ、スゲー。神カツケー！」

と子供の頃の馬鹿な俺にかかればこの程度だ！今思えばココが引き時だつたのかもしれないそうすれば桃代に扱き使われない人生が待つていたはずだ、今更思い返しても遅いのだが。そんな将来の俺の後悔など知る由もなくはしゃぎ回る子供の頃の俺。まあ、後にするから後悔なんですけどね。

「どうやつたらそんなこと出来るの？てか、もつかい飛びたい
はしゃいでる俺を一人はじつと見てる。

「和樹は私の力怖くないの？」

少し不安そうに桃代が尋ねてきた。

馬鹿面を曝しながら「なんで？スゲーカツケーじゃん！」と答え
る俺。

「だつて私は前の所で男の子に怪我させちゃつたし……」

「皆怖がつて遊んでくれなくなつたもんね」

「怪我なんて一人で遊んでたつてするじゃん」

今考えるとそういう問題か？つてくらい的を射てない発言だが、これで桃代の気持ちは少しうつかりしたらしく。

「そつか。凄いか私は……」

「そつだよ。凄いよ、ヒーローみたいだ」

「そつか凄いか私はヒーローみたいか！良しじやあ今日から私がリーダーな年も一番上だし」

このやり取りで桃代は調子に乗つた。過去のこととは氣にはしても所詮子供煽てられてすぐに調子をとり戻した。

「じゃあ、遊びに行くぞ！」

「「おうー。」「

この衝撃的な出会いから、好奇心旺盛で馬鹿な子供の俺、奇妙な能力を持つ姉桃代とその弟颯太との関係は続いていき今に到るわけだ。

現在に至るまでの経緯としてリーダーの座を奪おうと桃代に挑むこと数回しかしどれも惨敗に終わる、というのをここに書いておきたい。けしてやられるがままに来たわけではない。抵抗の歴史もあつたのだ。その代表として空手を始めたりもした、だが俺が始めたことにより二人も始めたので差が縮まることはなくむしろ少し開きさえしたきがする。それが桃代の地位を確固たるものにしてしまつた氣さえする。だがおかげで子供ならではの公園などでの場所とりの喧嘩なども負け知らずでやつてきた。桃代はまさにガキ大将という名をほしいままにしてきた。そしてその子分1・2としてそれなりに俺たちの名もこの町では有名人になつていつた。

斬つても切れない縁でわけではなかつたはずだ。自分が喰い付か

なければすぐに切れていた希薄なものだつたはずだ。しかし、俺は喰らいつき友達になれとせがんだ、今になつて思えば他にも引き返すチャンスはいくつか存在していた。だがその度に俺は離れることを拒みそばにい続けたこいつ等といれば人生が楽しめると踏んで遊び続けた。決して後悔はしていない！と胸は晴れないが。楽しくなるという予感は的中した。今じやすつかり調教済みな感じになつてしまつているけどね。

ヒーロー。『ガキ大将』（後書き）

相変わらず下手ですみません。

「」まで読んでいただきマジ感謝です。

長々と過去話をしてしまいましたが。あの出会いからもう十年が経ちまして、俺たちは無事高校生になりました。ベリーショートぐらいだった髪型が中学に入ったあたりからロングになり、高校生2年生になつた桃代姉さんはスタイルもなんというかすっかり女らしく（胸はそんにないけど）なり校内でもトップレベルの美人さんとして名を馳せてらつしゃる。弟の颯太は中2あたりで成長期に入り高校1年の今では190cm近い大男へと変身を立派に遂げやがった。

かく言つ俺はというと成長期が少し遅れ気味で158cmで今のところストップ気味である。まあこれから伸びるけどね！ぐんと伸びるけどね！別に強がりなんていつてないんだからね！……失礼ちょっと取り乱しちゃつた！最近この二人と並んでるとよく弟に間違われることがるけど俺はくじけない。

そのすっかり美人に成長してしまつた桃代姉さんなんですが今のところ彼氏は出来ずじまいである。理由は大方察しがつくだろうが小学校学区内が一緒だった人間（男子に限つて）は恐怖が身に沁みているというのがしつくりとくる。中学ではガキ大将はなりを潜めた為少し遠い地域から來た人間は何人か告白してきたらしがすべてＫＯ、その中に少したちの悪いやつが居てその後もしつこく付きまとわれついに切れた桃代姉さんが実力をもつてこれをＴＫＯ、さらにこれに逆恨みをして仲間を集めて桃代姉さんを襲撃この時は俺たちも居たから良く覚えてるが例の能力を行使してバイクを片腕で持ち上げ投げつけようとするという荒業をやってのけ相手を恐怖のどん底に突き落とした。

ちなみに俺らは何をしていたかと言つと必死で投げるのを止めて

いました。

そんなこんなでやつと冒頭に戻りまして、美人なんですが彼氏のいない桃代姉さんの夏休みの遊び相手とたびたび召集されていると、いつわけです。

「麦茶で一腹もしたし、そろそろどう致しましょうか？てか、そもそも何するために呼んだのさ」

「ここの前水着買つたから見せてあげよつと想つてね。海かプールいければって」

「ふつ、そんなえしい胸見て誰が喜ぶと」

「颯太お前なつー聞こえるぞー！」

「大丈夫よ。ばつちり聞こえてるから」
ゾクツと寒気が背中を駆け抜ける

「じゃあ、そんな腐つた目はいらないわね」

「ねつ姉ちゃん嘘だよ」冗だつ、ぎいやはあああああああああ

「ここの田魚が巣穴に見えるかのような自然な動作で美しい指先が眼球に突き立てられた！ひいいい怖つ！」

田を真つ赤に充血させながら床を転げ回る弟を見下ろし一通り悶えているのを確認した後、こちらに振り返り「和樹は私の水着姿を目に焼き付けたいわよね」と確認を取つてくる

「もちろんやつー今日は桃代姉さんの水着を余すところなく愛でたいね」

「うんつ。そうかそうか和樹は素直でいいわね、じゃあ暑いけど出かけましょうか」

「「」解」」

いつの間にか颯太復活してるし、あいつ最近着々と打たれずよくなってきてんな。いや、そんなことなかつたわ充血して涙がどどまるところを知らずあふれ出してる。

そんなこんなでやつて来ました！プールさあここでお楽しみの水着time今日の桃代姉さんの水着は膝下くらいまであるパレオを巻いた黒のビキニタイプ。パレオのスラックスから見える足がたりませんね、はい。

胸がいつもより膨らんで見えるのはみてみないふり、女のプライドだそうですから昔指摘してプールに沈められたのは今もいい思い出

「水辺に着いたんだからまずはあれでしょ」

「「あれね」」

「せーの」、「「海だーーー」」

「ちがうーー」、「間違えた！」、「のりで」

「じゃあもう一度」

「「「プールだーーー」」

ばしゃーん！…！

「超気持ちe」

「生き返るわ～」

「そりやプールとか何年ぶりだらうね？」

「去年も来たからしかも何回も。お前色々大丈夫か颯太」

「そうよ。それに、颯太目が赤いわよ。カルキがもうしみたの？」

「いや、目が赤いの姉ちゃんのせいだから！さっきのまだ治つてな

いだけだから…」

恐ろしいな。俺なんかさつきの悲鳴が耳にこびりついてはなれな
いつてのにやつた本人は即効で忘れてるとか。まあ、颯太だし心配
する事もないか、基本が丈夫だし。

「じゃあ少し泳ぎましょ、せっかく来たんだから。流れるプールの
流れに逆らつてやるとこう意気込みで泳ぎましょう」

「いいねえ」

「じゃ、しばし自由行動！散開」

夏のプールはいいもんですね。辺りには裸同然の女性が水に濡れ
てるんですよ、女性が濡れてるんです。大事なことだから2回言い
ました。思春期の桃色の思考はこれくらいにして取り敢えずこれか
らどうしようかな一通り泳いで疲れたから少し休憩でも使用かな。
ちょうどすぐ近くのベンチが空いてるしあそこで休憩でもしますか。

「ふう、あつち」

「和樹はもう休憩？」

声がしたほうに目をやると桃代姉さんがベンチの隣に腰をかけよ
うとするとこりだつた

「桃代姉さんは？」

「私も少し休憩しようと思つてたところにちょうど和樹がベンチに

座つたのが見えたから」

そう言つて俺の隣に腰掛ける。水に濡れた桃代姉さんの黒く長
い髪が体に張り付いていてなんとも言えない色気を醸し出していて
少しどキリとしてしまつた。

「疲れたのでジュース買つてきててくれる？」

「……えつ？」

「だからジュース買つてきてくれるかしら？」

「えっ、ああ。いいよ、買ってくる。何がいいの？」

不覚にも見とれていたらしい。長年一緒にいるんだからいまさら意識も何もないもんだと思うけど？今日は俺疲れてるのかな。

「オレンジお願いしたいんだけど。ってなんかまたボーッとしてない、そんなに疲れた？やっぱり私行こうか」

「いや大丈夫だよ。オレンジでいいんだよね行つてくれる」

そう言つてその場を少し急ぎ足で離れていった。何だつたんだろ、桃代姉さんにはまさしく異性とか意識しないと思うんだけどな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6077k/>

最凶なあの人

2011年10月6日15時05分発行